

津
端
亨
編纂

現代短歌分類辭典

新裝判
30卷

現代短歌分類辞典

新装版30卷

通巻 1 8 8

平成五年四月十二日発行

定価 一六、〇〇〇円

著者発行
兼印刷者

津 端 亨

発行所

現代短歌分類辞典刊行所

代表 津 端 亨

〒 345

埼玉県北葛飾郡杉戸町宮前一九六―五

電話 (〇四八〇) 三八―〇〇四〇番

振替 東京三十九三二一四

(ISBN 4-87706-188-6)

目

次

第三十卷（通巻第百八十八巻）

目次	歌数	頁数	歌数	頁数	歌数	頁数
たる	三	二	たれこむ〔垂れ込む〕	一	三	二
たるいり〔樽入り〕	一	二	たれこめる〔垂れ込める〕	一	三	一
たるがき〔樽柿〕	一	二	たれさがる〔垂れ下がる〕	四	三	七
たるき〔垂木〕	二	二	だれしらぬ〔誰知らぬ〕	二	三	二
たるざけ〔樽酒〕	二	二	だれだれ〔誰誰〕	二	三	二
たるづめ〔樽詰〕	一	二	だれびと〔誰人〕	七	三	一
たるひ〔垂氷〕	四	二	だれひとり〔誰一人〕	八	三	三
たるひ〔足日〕	一	三	たれまく〔垂れ幕〕	二	三	四
だるま〔達磨・ダルマ〕	一	四	だれもかも〔誰も彼も〕	二	三	四
だるまいち〔達磨市〕	一	四	だれもかれも〔誰も彼も〕	二	三	四
だるません〔達磨船〕	二	四	たれる〔垂れる〕	六	四	五
だるまでら〔達磨寺〕	三	四	たれんと〔タレント〕	一	四	二
だるまやま〔達磨山〕	三	四	たろう〔太郎〕	三	四	七
たるみ〔弛み〕	三	五	たろう	八	三	五
たるみ〔垂水〕	二	五	だろ	八	三	四
たるむ〔弛む〕	七	六	たろうぼう〔太郎坊〕	六	三	二
たるめる〔弛める〕	一	六	たろうやま〔太郎山〕	二	三	一
たれ〔垂れ〕	三	六	たろうべえ〔太郎兵衛〕	一	三	三
だれ〔誰〕	二	四	たわあ〔タワ―〕	二	三	五
たれがみ〔垂れ髪〕	三	三	たわいなく	五	三	一
だれかれ〔誰彼〕	三	三	たわいなき	九	三	二

たわやかさ	一	四三	たなかあ〔タンカー〕	四	五	だんげん〔断言〕	二	五
たわやすし〔容易し〕	二	四三	たんがい〔痰咳〕	一	五	たんご〔単語〕	二	五
たわやめ〔手弱女〕	三	四三	だんかい〔団塊・くれ・かたまり〕	四	五	たんご〔端午〕	四	五
たわら〔俵〕	六	四四	だんかい〔段階〕	三	五	たんご〔タンゴ〕	三	五
たわなる	七	四四	だんがい〔断崖〕	一七	五	たんご〔丹後〕	三	五
たを〔峠〕	一	四七	たんかいとう〔探海灯〕	三	五	だんご〔団子〕	二六	五
だん〔段・きだ〕	七	四七	たんかつしよく〔淡褐色〕	一	五	たんこう〔単行〕	一	五
だん〔壇〕	二	四九	たんがん〔嘆願・歎願〕	一	五	たんこう〔炭坑〕	一	五
たんあたり〔反當り・反当り〕	二	四九	だんがん〔彈丸〕	一三〇	五	たんこう〔淡紅〕	一	五
だんあつ〔彈圧〕	五	四九	たんがんしよ〔嘆願書〕	二	五	たんこう〔淡黄〕	二〇	五
たんい〔単位〕	八	四九	たんき〔短期〕	一	五	だんこう〔団交〕	一	五
だんいほうしよく〔暖衣飽食〕	二	四九	だんき〔暖氣〕	六	五	だんこう〔男工〕	一	五
たんいつ〔單一〕	一	四九	だんぎ〔談義〕	二	五	だんこう〔断口〕	二	五
だんいん〔団員〕	八	四九	たんきゅう〔探求〕	一	五	だんこう〔談合〕	一	五
だんう〔彈雨〕	九	五〇	だんきゅう〔段丘〕	一九	五	だんこく〔暖国〕	二	五
だんうん〔斷雲〕	四	五〇	たんきより〔短距離〕	二	五	たんごさか〔団子坂〕	三	五
だんえん〔團円〕	一	五〇	たんく〔タンク〕	七五	五	たんごのせつく〔端午の節句〕	三	五
たんおん〔単音〕	二	五〇	たんぐすてん〔タングステン〕	二	五	たんこぶ〔たん瘤〕	一	五
たんおん〔短音〕	一	五〇	たんくつ〔短靴〕	五	五	だんこん〔男根〕	二	五
たんか〔担架〕	三	五〇	たんくろうりい〔タンクローリー〕	一	五	だんこん〔彈痕〕	二〇	五
たんか〔単価〕	一	五一	たんげつ〔淡月〕	二	五	たんざ〔端坐・端座〕	七	五
たんか〔啖呵〕	二	五一	だんけつ〔団結〕	二	五	だんざあ〔ダンサー〕	六	五
たんか〔短歌〕	七	五一	たんけん〔短剣〕	一	五	たんさい〔淡彩〕	八	五
だんか〔檀家〕	四	五三	たんげん〔端嚴〕	五	五	だんざい〔断罪〕	二	五

たんさいぼう〔単細胞〕	三	六	だんじよ〔男女・なんによ・をみな〕	二四	七	だんせい〔弾性・彈性〕	二	六
たんさく〔單作〕	三	六	たんじよう〔誕生〕	二	六	たんせき〔旦夕〕	三	六
たんざく〔短冊〕	三五	七	たんしyou〔談笑〕	七	六	たんせき〔胆石〕	三	七
たんざわ〔丹沢〕	二七	七	だんじyou〔壇上〕	一六	六	だんぜつ〔斷絶〕	六	七
たんざわやま〔丹沢山〕	二	七	たんじyouじ〔誕生寺〕	一	六	たんせん〔單線〕	五	七
たんざん〔炭山〕	六	七	たんしyouとう〔探照灯〕	二三	六	たんぜん〔丹前〕	七	七
たんさん〔炭酸〕	二	七	たんじyouび〔誕生日〕	七	六	たんぜん〔端然〕	一六	七
たんさんすい〔炭酸水〕	六	七	たんしyou〔單色〕	七	六	だんぜん〔断然〕	三	六
たんし〔單子〕	一	七	たんしん〔短身〕	一	六	たんせんきどう〔單線軌道〕	三	六
たんし〔短詩〕	一	七	たんす〔簞笥・タンス〕	一六	六	たんせんでんしや〔單線電車〕	三	六
だんじ〔男兒〕	八	七	だんす〔ダンス〕	一五	六	たんそう〔担送〕	一	六
だんじき〔斷食〕	一五	七	たんすい〔淡水〕	四	六	たんそう〔炭層〕	九	六
だんしち〔団七〕	三	七	だんすい〔斷水〕	四	六	だんそう〔男装〕	二	六
たんじつ〔短日〕	五	七	たんすう〔單数〕	一	六	だんそう〔斷層〕	三	六
だんしつ〔暖室〕	二	七	だんすばあてい〔ダンスパーティー〕	三	六	たんそうしや〔担送車〕	二	六
だんじて〔断じて〕	三	七	だんすほおる〔ダンスホール〕	八	六	だんそうめん〔斷層面〕	二	六
たんじyou〔短銃〕	四	七	だんずる〔斷ずる〕	一	六	たんそく〔嘆息・歎息〕	七	六
たんしyou〔短縮〕	三	七	だんずる〔彈ずる〕	一	六	だんぞく〔斷続〕	一六	六
たんじゆん〔單純〕	二四	七	たんせい〔丹誠・丹精〕	九	六	だんたい〔団体〕	九	六
たんじゆんか〔單純化〕	五	七	たんせい〔歎声・嘆声〕	二	六	だんたいきやく〔団体客〕	四	六
たんじゆんしyou〔單純性〕	一	七	たんせい〔端正・端整〕	七	六	だんだら〔段だら〕	一〇	六
たんじゆんせい〔單純性〕	一	七	だんせい〔男声〕	三	六	だんだらさか〔段だら坂〕	一	六
たんしyou〔短所〕	三	七	だんせい〔男性〕	八	六	たんたん〔担担〕	七	六
たんしyou〔端緒〕	二	七	だんせい〔男性的〕	二	六	たんたん〔湛湛〕	一	六

だんだん〔團々〕	一	九	だんとう〔暖冬〕	一三	一〇〇	だんぱつ〔断髪〕	六	一〇四
だんだん〔段々〕	一六	九	だんどく〔単独〕	一	一〇〇	だんび〔嘆美〕	一	一〇四
たんとんと〔淡淡と〕	一三	九	だんどり〔段取り〕	一	一〇〇	だんび〔断碑〕	三	一〇四
だんだんばたけ〔段段畠・段々畑〕	二六	五	たんな〔旦那〕	五	一〇〇	だんぶ〔段歩〕	一	一〇四
だんち〔団地〕	一四	五	だんな〔旦那・檀那〕	一	一〇〇	だんぶかあ〔ダンブカー〕	五	一〇四
だんちく〔暖竹・葭竹〕	一	六	だんなじ〔檀那寺・だんなでら〕	二	一〇〇	たんぶん〔短文〕	三	一〇四
だんちせい〔暖地性〕	一	六	たんなたりや	一	一〇〇	だんぺいせん〔团平船〕	一	一〇四
だんちやく〔彈着〕	四	六	たんなる〔単なる〕	三	一〇〇	たんぺき〔炭壁〕	一	一〇四
たんちよ〔端緒〕	二	六	たんに〔単に〕	六	一〇〇	たんぺん〔短編〕	三	一〇四
たんちよう〔丹頂〕	四	六	たんねん〔丹念〕	七	一〇〇	だんぺん〔断片〕	二	一〇五
たんちよう〔単調〕	四	七	だんねん〔断念〕	二	一〇〇	たんぼ〔旦暮〕	八	一〇五
たんちよう〔短調〕	一	九	たんのう〔堪能〕	三	一〇〇	たんば〔田圃〕	五	一〇五
だんちよう〔断腸〕	一	九	だんのうら〔壇の浦〕	五	一〇〇	たんぼ〔湯婆〕	三	一〇七
たんちようづる〔丹頂鶴〕	四	九	たんば〔丹波〕	四	一〇〇	たんぼう〔探訪〕	一	一〇七
だんつう〔綴通〕	一	九	たんば〔短波〕	一	一〇〇	だんぼう〔暖房〕	一五	一〇七
たんつば〔痰壺〕	四	九	たんぱく〔淡泊〕	一	一〇〇	だんぼう〔暖房器〕	一	一〇八
たんてい〔短艇〕	五	九	たんぱく〔蛋白〕	一	一〇〇	だんぼうそうち〔暖房装置〕	二	一〇八
だんてい〔断定〕	一	九	たんぱくこう〔蛋白光〕	一	一〇〇	たんばみち〔田圃道〕	九	一〇八
たんてき〔端的〕	二	九	たんぱくしつ〔蛋白質〕	三	一〇〇	たんぼぼ〔蒲公英〕	二五	一〇八
たんでん〔丹田〕	三	九	たんぱくしよく〔蛋白色〕	二	一〇〇	だんまく〔彈幕〕	二	一〇四
だんと〔檀徒〕	一	九	たんぱくり〔丹波栗〕	七	一〇〇	たんまつ〔端木〕	一	一〇四
たんとう〔担当〕	一	九	たんばこづつみ〔丹波小鼓〕	一	一〇〇	だんまつま〔断末魔〕	三	一〇四
だんどう〔彈道〕	七	九	たんばぎかい〔丹波境〕	一	一〇〇	だんまり〔黙り〕	五	一〇四
だんどう〔壇道〕	一〇	九	だんばた〔段畑〕	二	一〇〇	たんめい〔短命〕	二	一〇五

5

ちかく〔地殻〕	二	一八	ちかま〔近間〕	二	三四	ちきゅうぎ〔地球儀〕	二〇	二四五
ちかく〔知覚〕	八	一八	ちかまさり〔近優〕	二	三四	ちぎよ〔稚魚〕	二	二四五
ちかけい〔地下茎〕	五	一八	ちかみち〔近道〕	三	三四	ちきよう〔地峡〕	三	二四五
ちかごろ〔近頃〕	二	一八	ちかめ〔近目・近眼〕	一五	三五	ちきよう〔地境〕	三	二四五
ちがさき〔茅ヶ崎〕	二	一八	ちがや〔茅薺〕	二	三五	ちきようだい〔乳兄弟〕	二	二四六
ちかし〔近し〕	五三	一八	ちかやか〔近やか〕	二	三六	ちぎり〔契り〕	一〇	二四六
ちかしい〔近しい〕	一	一五	ちかやま〔近山〕	二	三六	ちぎり〔千切り〕	四	二四八
ちかしげん〔地下資源〕	二	一五	ちかよりみる〔近寄り見る〕	一	三六	ちぎる〔千切る〕	九	二四九
ちかしつ〔地下室〕	四	一五	ちかよる〔近寄る〕	一八	三六	ちぎる〔契る〕	五	二五〇
ちかしよくどう〔地下食堂〕	五	一五	ちかよる―なかれ〔近寄るなかれ〕	一	三六	ちぎれぐも〔千切れ雲〕	七	二五〇
ちかすい〔地下水〕	六	一五	ちから〔力〕	六五	三七	ちぎれば〔ちぎれ葉〕	一	二五一
ちがたな〔血刀〕	二	一四	ちからあし〔力足〕	一	四〇	ちぎれる〔千切れる〕	三	二五一
ちかたび〔地下足袋〕	三	一四	ちからいっぱい〔力一杯〕	二	四〇	ちく〔地区〕	二五	二五一
ちかちか〔チカチカ〕	三	一五	ちからこぶ〔力瘤〕	一	四〇	ちぐう〔知遇〕	一	二五一
ちかぢか〔近々〕	一七	一五	ちからしごと〔力仕事〕	一	四〇	ちくおんき〔蓄音機〕	二	二五二
ちかづき〔近づき〕	三六	一五	ちからしば〔狼尾草〕	三	四〇	ちくご〔筑後〕	七	二五三
ちかづく〔近づく〕	五五	一七	ちからぬけ〔力抜け〕	四	四一	ちくごがわ〔筑後川〕	九	二五三
ちかづける〔近づける〕	三	一〇	ちかん〔弛緩〕	一	四一	ちくごやく〔逐語訳〕	一	二五三
ちかてつ〔地下鉄〕	六	一三	ちかん〔痴漢〕	一	四一	ちぐさ〔千草〕	九	二五三
ちかてん〔地下店〕	一	一三	ちき〔知己〕	二	四一	ちくさい〔蓄財〕	一	二五四
ちかどう〔地下道〕	七	一三	ちき〔稚氣〕	三	四一	ちくし〔竹枝〕	二	二五四
ぢかに〔直に〕	一	一四	ちき〔千木〕	三〇	四一	ちくしの〔筑紫野〕	二	二五四
ちかのうら〔千賀の浦〕	三	一四	ちきたりす〔チキタリス〕	九	四二	ちくしゃ〔畜舎〕	一	二五五
ちかび〔近火〕	二	一四	ちきゅう〔地球〕	二四	四二	ちくしょう〔畜生〕	六	二五五

ちくじょう〔竹杖〕	四	二五	ちくるい〔畜類〕	二	二六	ちしつ〔地質〕	一	二七〇
ちくじょう〔築城〕	五	二五	ちくわ〔竹輪〕	四	二六	ちじつ〔遅日〕	二	二七〇
ちくしょうどう〔畜生道〕	二	二五	ちくわぶ〔竹輪麩〕	一	二六	ちしつしよ〔地質書〕	一	二七〇
ちくせき〔蓄積〕	三	二五	ちけい〔地形〕	三	二六	ちしつず〔地質図〕	一	二七〇
ちくぜん〔筑前〕	五	二五	ちけつと〔チケット〕	一	二六	ちしま〔千島〕	二	二七〇
ちくぞう〔蓄藏〕	一	二五	ちけむり〔血煙〕	一	二六	ちしまかいきよう〔千島海峡〕	一	二七〇
ちくたく〔チクタク〕	一	二五	ちけん〔知見〕	一	二六	ちしまれつとう〔千島列島〕	一	二七〇
ちくちく	三	二五	ちこ〔知己〕	六	二六	ちぢみざき〔縮笹〕	一	二七〇
ちくてい〔築庭〕	七	二五	ちご〔稚児〕	充	二六	ちしや〔萬莖〕	九	二七二
ちくていこうじ〔築堤工事〕	一	二五	ちこう〔地溝〕	一	二六	ちしや〔治者〕	一	二七二
ちくとう〔竹刀〕	三	二五	じごえ〔地声〕	一	二六	ちしや〔知者・智者〕	一	二七二
ちくば〔竹馬〕	二	二五	ちこく〔遅刻〕	七	二六	ちしやーのーき〔萬莖の木〕	四	二七二
ちくはく〔竹柏〕	二	二五	ちごちご	一	二六	ちじゆ〔稚樹〕	五	二七二
ちくはぐ	四	二五	ちごまつり〔稚児祭り〕	一	二六	ちしゆ〔地主〕	一	二七二
ちくはくえん〔竹柏園〕	八	二五	ちさき〔小さき〕	一	二六	ちじよう〔地上〕	二	二七二
ちくばのとも〔竹馬の友〕	一	二五	ちさく〔小さく〕	一	二六	ちじよう〔痴情〕	三	二七四
ちくび〔乳首〕	六	二五	ちさし〔小さし〕	三	二六	ちじようけん〔地上権〕	一	二七四
ちくひつ〔竹筆〕	二	二五	ちさとほま〔千さと涙〕	一	二六	ちじよく〔恥辱〕	四	二七四
ちくぶじま〔竹生島〕	二〇	二五	ちさん〔遅参〕	一	二六	ちしりよう〔致死量〕	三	二七四
ちくまがはら〔千曲川原〕	一	二五	ちじ〔知事〕	三	二六	ちしん〔地心〕	四	二七五
ちくまがわ〔千曲川〕	六	二五	ちしお〔血潮〕	三	二六	ちしん〔地神〕	二	二七五
ちくよう〔竹葉〕	三	二五	ちしき〔知識〕	二	二六	ちじん〔知人〕	一	二七五
ちくりん〔竹林〕	二七	二五	ちしきじん〔知識人〕	二	二六	ちず〔治す〕	一	二七五
ちくりんいん〔竹林院〕	五	二六	ちじく〔地軸〕	二	二六	ちず〔地図〕	二	二七五

ちすじ〔千筋〕	三	二二	ちち	一九	二二	ちちはる〔千チハル〕	五	二五
ちすじ〔血筋〕	四	二二	ちちいろ〔乳色〕	三	二四	ちちぶ〔秩父〕	二〇	二五
ちせい〔地勢〕	六	二二	ちちうえ〔父上〕	五	二四	ちちぶおろし〔秩父風〕	八	二八
ちせい〔知性〕	六	二二	ちちおや〔父親〕	二	二六	ちちぶさんぐん〔秩父山群〕	一	二八
ちせき〔地積〕	一	二二	ちちかまる〔縮かまる〕	一	二六	ちちぶじん〔秩父人〕	一	二八
ちせきいん〔地積院〕	二	二二	ちちぎみ〔父君〕	二	二六	ちちぶじんじや〔秩父神社〕	一	二八
ちせつ〔稚拙〕	五	二三	ちちかむ〔縮かむ〕	一	二七	ちちぶのみや〔秩父の宮・秩父宮〕	七	二八
ちそう〔地相〕	一	二三	ちちぐさ〔乳草〕	一	二七	ちぢまる〔縮まる〕	八	二八
ちそう〔地層〕	三	二三	ちちくさい〔乳臭い〕	一	二七	ちぢみ〔縮み〕	二五	二九
ちそう〔馳走〕	三	二四	ちちくび〔乳首〕	二	二七	ちぢむ〔縮む〕	二	二九
ちぞう〔地蔵〕	一	二四	ちちこぐさ〔父子草〕	五	二八	ちぢむる	四	二九
ちそく〔遅速〕	二	二四	ちぢこまる〔縮こまる〕	一	二八	ちぢめる〔縮める〕	二	二九
ちた〔知多〕	七	二四	ちちしほり〔乳しほり〕	一	二八	ちちゆう〔地中〕	八	二九
ちたい〔地帯〕	一	二五	ちちじま〔父島〕	一	二八	ちちゆうかい〔地中海〕	九	二九
ちたい〔遅滞〕	一	二六	ちちたる〔遅々たる〕	一	二八	ちぢれる〔縮れる〕	二	二九
ちだい〔地代〕	一	二六	ちちたけ〔乳茸〕	二	二八	ちちろむし〔ちちろ虫〕	四	二九
ちたはんとう〔知多半島〕	二	二六	ちちとして〔遅々として〕	四	二八	ちつかん〔竹竿・たけざお〕	八	二九
ちたび〔千度〕	四	二六	ちちに〔千々に〕	二	二八	ちつきよ〔蟄居〕	一	二九
ちだんだ	一	二六	ちちのき〔乳の木〕	一	二九	ちっこう〔築港〕	四	二九
ちち〔父〕	二、八五	二八	ちちのひ〔父の日〕	二	二九	ちつじよ〔秩序〕	二四	二九
ちち〔乳〕	三七五	三五	ちちのみの	二八	二九	ちつそ〔窒素〕	一	二九
ちち〔遅遅〕	一七	二六	ちちばなれ〔乳離れ〕	一	二九	ちつそく〔窒息〕	三	二九
ちち〔千千〕	三三	二六	ちちはは〔父母〕	五三	二七	ちつーた〔散った〕	一	二九
			ちはやぶる	二	二五	ちつと〔些と〕	一	二九

ちつとも〔些も〕	一	三九三	ちどん〔遅鈍〕	三	四〇二	ちひろいわ〔千尋岩〕	二	四〇八
ちっぽけ	一	三九三	ちねつ〔地熱〕	一〇	四〇三	ちふ〔茅生〕	三	四〇八
ちてい〔地底〕	二四	三九二	ちの〔茅野〕	九	四〇三	ちふ	三	四〇八
ちてき〔知的〕	一	三九二	ちのあめ〔血の雨〕	一	四〇三	ちぶ〔恥部〕	四	四〇九
ちてん〔地点〕	三三	三九二	ちのいけ〔血の池〕	三	四〇三	ちぶさ〔乳房〕	一六七	四〇九
ちと〔些と〕	一	三九三	ちのう〔知能・智能〕	五	四〇三	ちぶす〔チブス〕	五	四一三
ちとう〔地塘う〕	一	三九三	ちのけ〔血の気〕	九	四〇三	ちぶつ〔地物〕	一	四一三
ちとせ〔千歳〕	三九	三九三	ちのみこ〔乳児〕	一	四〇四	ちへ〔千重〕	一	四一三
ちとせ〔千歳〕	三	三九六	ちのり〔血糊〕	一	四〇四	ちへい〔地平〕	二〇一	四一三
ちとせがわ〔千歳川〕	五	三九六	ちば〔千葉〕	四四	四〇四	ちへいせん〔地平線〕	二五	四一五
ちとせくこう〔千歳空港〕	一	三九六	ちば〔地盤〕	一	四〇五	じべた〔地直〕	一	四一六
ちとせむら〔千歳村〕	一	三九六	ちはい〔遅配〕	七	四〇五	ちべつと〔チベツト〕	一	四一六
ちどめ〔血止〕	一	三九六	ちばしる〔血走る〕	一	四〇五	ちへなみ〔千重波〕	一	四一六
ちどめぐさ〔血止草〕	一	三九六	ちばなれ〔乳離れ〕	一	四〇五	ちへのひとへも〔千重之一重も〕	一	四一六
ちどめくすり〔血止め薬〕	一	三九六	ちはやじ〔千速路〕	一	四〇五	ちへん〔池辺〕	一〇	四一六
ちどり〔千鳥〕	二六	三九六	ちはやぶる〔千草振る〕	三	四〇五	ちほう〔地方〕	一三	四一六
ちどりあし〔千鳥足〕	一	四〇二	ちはん〔池畔〕	七	四〇六	ちほう〔痴呆〕	一六	四一七
ちどりがじょう〔千鳥が城〕	三	四〇二	ちび〔チビ〕	一	四〇六	ちほう〔智謀〕	一	四一七
ちどりがへで〔千鳥かへで〕	一	四〇二	ちひきいわ〔千曳岩〕	一	四〇六	ちほうじちたい〔地方自治体〕	二	四一七
ちどりがふち〔千鳥ヶ淵〕	八	四〇二	ちびちびと	一	四〇六	ちほうせんきよ〔地方選挙〕	一	四一七
ちどりききょう〔千鳥桔梗〕	一	四〇二	ちひびき〔地響〕	一	四〇六	ちほうばん〔地方版〕	一	四一七
ちどりそう〔千鳥草〕	六	四〇二	ちひよう〔地表〕	二六	四〇六	ちまき〔粽・茅巻き〕	三	四一七
ちどりのま〔千鳥の間〕	一	四〇二	ちびりちびり	二	四〇七	ちまた〔巷・衢〕	八六	四一八
ちどりばし〔千鳥橋〕	一	四〇二	ちひろ〔千尋〕	一七	四〇七	ちまちだ〔千町田〕	三	四一七

ちまちま〔チマチマ〕	二	四六	ちやえん〔茶園〕	二	四九
ちまなこ〔血眼〕	一	四八	ちやか〔茶菓〕	一	四九
ちまみれ〔血塗れ〕	二	四六	ちやかい〔茶会〕	七	四九
ちみ〔魑魅〕	一	四八	ちやがけ〔茶掛け〕	一	四六
ちみつ〔緻密〕	一	四六	ちやがし〔茶菓〕	一	四六
ちみどろ〔血みどろ〕	四	四八	ちやかっしょく〔茶褐色〕	五	四六
ちみもつりよう〔魑魅魍魎〕	二	四八	ちやがま〔茶釜〕	九	四六
ぢむし〔地虫〕	二	四九	ちやがゆ〔茶粥〕	五	四六
ちめい〔地名〕	三	四九	ちやがら〔茶殻〕	二	四六
ちめいじん〔知名人〕	一	四四	ちやがらび〔茶殻火〕	一	四六
ちめいてき〔致命的〕	一	四四	ちやき〔茶器〕	七	四六
ちもつ〔恥毛〕	一	四四			
ちもく〔地目〕	二	四四			
ちもじい〔チモヂー〕	二	四四			
ちもや〔地霧〕	三	四四			
ちや〔茶〕	七	四四			
ちやあちる〔チャーチル〕	五	四九			
ちやあみんぐ〔チャーミング〕	一	四九			
ちやいれ〔茶入れ〕	四	四九			
ちやいろ〔茶色〕	一	二九			
ちやうけ〔茶うけ・茶請け〕	三	四九			
ちやうす〔茶臼〕	四	四九			
ちやうすだけ〔茶臼岳〕	二	四九			
ちやうすやま〔茶白山〕	三	四九			
			計	一九、三七七首	

前巻「たる」より続く

ほしいままに土を扶^{たす}りて走りたるタレクの跡が代々木野にあり① （角川）

文庫

奉仕^{ほうし}団の掃き清めたる築山に登る兵見ゆ杖つけるあり （支那事変後）

ホースより水を引きたる菖蒲田の泥光りつつ花は真盛り⑦

程なしと教へられたる松の木を目的^{めて}にゆけどなかなか遠き

ほほけたる尾花が原をてらす日の日ざしよわくもなりまさりつつ③

堀切の星ちかからし花あやめつとに持ちたる人に逢ひぬる

滅びたる夢の絵巻も冬曝れて廃虚の街に斑雪はのこる②

幕開^{まく}くや三升^{みさき}の紋の提灯を吊りならべたる明るき舞台⑦

枕べに泣きあかしたるあかときに霰^{あられ}ふりしも忘れなくに

孫たちに見せてやらむと作りたる窓の朝顔見つわが病む

まどかにも照る月見れば昼の間のなやみくしたる我身ともなし （きさらぎ）

窓底深山の鳥の汚したる楼にわが見る浅間と牧と

まろめたる吾が掌^て見すれば幼子も柔^やしき掌をば小さくまろめぬ

見覚えのある屋敷町つぎつぎにあらはれきたる冬の下^{もと}④

みじか夜^よの昨日^{けふ}の夢に見えたるはながるる水のなにもなくして⑨

みだれたる机の前にみづからをあはれみて二〇あまり竜頭を捲きぬ⑤

乱れたる物のあひだに電熱器ともりて早き夕となりぬ②

水に散る夜振の炎かげひた澄みて梅雨近むらし闇の照濃さ （雪祭）

蒸しタオルもて拭きたる足を日にあてて溢るる光に酔ふ二分間

村なかに昼日照りたる広き辻ほしいままにも踊る人のむれ

芽生えより七年を伸びやうやくに百日紅は花をつけたる②

宮 柊 二

大野 定

長谷川 銀作

川 端 千枝

相馬 御風

金子 元臣

川 上 小夜子

岡野 直七郎

岩 上 寿子

菊池 知勇

和 田 山 蘭

與謝野 晶子

菱 田 忠 雄

窪 田 空 穂

前 川 佐 美 雄

鹿兒島 壽 藏

高 安 国 世

穂 積 忠

金 子 信三郎

釈 迢 空

石 川 まき子

もぐらもちあらしゆきたる庭苔はもたけられたるままに萌えをり （新万葉集二）

ものものしく迎へられたる友と別れ東京駅を吾が歩み出づ

百とせの千とせの一日待ち得たる筑紫の海はのどに波立つ⑥

森の中を遠くひきたる用水路秋は用なき水の流るる （朝日短歌二）

やうやくにのぼりそめたる月読^{つきよみ}の光のなに見ゆる敵兵①

焼跡の巷にふとも見出でたる柿の芽吹きひと目眼にあり

休みたる者を話題の中心にアルバイトわれら昼食をとる （朝日歌壇）

山の軒花ぐもりして水色を引ききたるなかに月のぼりきぬ

やはらかき竜舌蘭の光りたる葉がのびのびと春の陽を浴ぶ⑦

敗れたる日も持ちにつつわが道やばろばろにしてなほますぐなれ③

山道の野菊の花に蜜蜂一つ羽をとちたるままに休ろふ③

病みあがりの眼をひらかせてあるきたる浅草公園の人ごみの中⑥

病み床^{どし}に日中ねむれば光りたる父喉佛冬の日を浴ぶ⑥

病む妻も我もあははと振舞ひて秋日に似たる安けきもあり⑦

湯上りを柱によれば長旅の船のゆらぎのなほ残りたる①

雪の野のむなしき原に停りたる病院列車のマークが赤し （多磨二）

ゆくりなく逢ひたる人に朝鮮の山の葡萄をわけてわかれぬ （新万葉集三）

夕霞やうやく深し山曾根の櫓の竝木に実の残りたる （新萬葉集五）

夕方は雪にふりたる山風の日^ひにけにゆるび雨となりつつ⑨

夜あがりの雨にぬれたる庭の土ふめる春のぬくみをもてり②

よちよちと歩みそめたる幼児は畳のへりにつまづくあはれ （新万葉集一）

夜の町^{まち}のあかるきなかに見りてたるわれのみなりのわれとをかしき①

夜のまより雨ふりぬらし朝露のふかくみえたるにはの若草

川 北 慎 一

川 田 順

島 木 赤 彦

日 高 為 也

藤 森 朋 夫

太 田 青 丘

小 林 吉 五 郎

與謝野 寛

金 子 薫 園

斎 藤 史

久 保 田 不 二 子

土 岐 善 麿

宮 柊 二

高 安 国 世

松 田 常 憲

関 口 吉 郎

小 泉 茅 三

塚 原 正 芳

中 村 憲 吉

西 郷 春 子

内 田 守 人

岡 野 直 七 郎

昭 憲 皇 太 后

夜は更けぬ火だねわづかに残りたる火鉢の鉄に触るる冷たさ①

昨夜の雨に濡れつくしたる舗装路を朝はつめたく人の行きかふ(多磨四)

寄りあひて乗りたるバスの展望に友よ愛憎もわすれはつべし②

よる更けて脳病院の二階の窓明るくあけたる窓ひとつあり

芦溝橋に火蓋切りたる太魂は亜細亜大陸をひた行きに行く⑦

蠟の灯に照りあからめるみ仏の細く引きたる眉あはれなり②

列車より父に引かれて離れたる母の瞳は吾を見つめをり

楼に見る雨の藤棚花房もわが葉もぬれてもりあがりたる⑨

わがむすめひとり寝台に目ざめたる小さきあくびの春のあけぼの

我妹子がならべほしたる雨傘にあきつとまれり秋の日をよみ

わたつみに向ひてゐたる乳牛が前脚折りてひざまづく見ゆ(霧)

わづか雪ふりて朝の都会舗道ふみ汚したる雪解けをりぬ⑧

わび住みの春ゆく時に見出でたる鉄線蓮の淡きむらさき①(碧湖)

藁草履はきたる足のあつからむ焼土路に童女らはるる⑥

をち方に屋むら見えたる府中町八〇(くもむら) 叢につづきつつ見ゆ

男湯はあけはなちたる窓にしてのうぜんかづらの花明りつつ(多磨四)

小山田の野芹れんげを浸したる水はあふれぬわが行く徑に②

月かげの青く光りてゆれるるを紙帳(とよ)のなかにわれは見てをり

たるいり【名詞】

〔樽入り〕

樽にはいつていること。又、そのもの。

倉にあまり道に積まれし樽入りの貨物に屋根の雪なだれ落つ②

たるがき【名詞】

〔樽柿〕

渋柿を酒の空樽に入れておき酒気で渋味を除いた柿の実。又、樽抜きとも云う。

玻璃戸透く日ざし光らず樽柿の皮むきてかちるペン画描きつつ

たるき【名詞】

〔垂木〕

屋根板を支えるために棟木から軒桁に架け渡す長い材。はえき。たりき。

朝々にやさしき鐘のひびきして赤きたるきに鳥のあつまる①

迎ぎ見る塔の簷先反り強く垂木あかしも雪降る中に

神杉のしみたつ中に大廟の垂木の金はにぶみ光れり(藤巻)

垂木くらく簷のかぶさる講堂に階のぼりくる人の足おと

月清み軒の垂木に鳴く蟲の羽根ふるさまさやに見えつつ

なまよみの甲斐の谷あひの大屋根のたるきの下を寝どころにして⑥

軒の垂木みるともなくみてゐるそのところに映れる春灯①

柱また垂木となさむ杉丸太重ねし上に夜の雪残る④

日のあたる丸太垂木の瞳に親しこの安らぎは臥りゐのものが①

ふるさとの家の厨のすす垂木つるす新巻鮭の大き眼の玉①

わが肩にふるるばかりになだれたる軒の垂木をしたしく仰ぐ②(山棲)

たるざけ【名詞】

〔樽酒〕

初夏の朝の岸壁に荷揚げせる樽酒匂ふいかにさやけき①

漁あみに祝樽酒なげ入れて樽したびに魚はしるみゆ④

たるづめ【名詞】

〔樽詰〕

樽詰の私からホラ血が垂れる滴々と止めどなく血が垂れる私の終り⑤ 小宮 良太郎

たるひ【名詞】

〔垂氷〕

雨、雪などの水が軒・岩角などから、したたりながら凍って垂れ下がったもの。つらら。

明けわたる軒にならびて大いなる垂氷のよごれみつつ寂しき③

朝の陽は障子一面にかがよひてとくる垂氷の影をうつせり(新万葉集四)

雨怒り雪を水とし猶足らず山の垂氷を斧として投ぐ⑬

幾筋か垂氷の白さ目に見えて夕靄かかる山の高きし⑦

百田 楓花

竹 迫 保

川 上 小夜子

古 泉 千 櫻

今 井 邦 子

矢 部 道 氣

菅 野 政 毅

高 田 浪 吉

土 岐 善 麿

三 浦 守 治

斎 藤 茂 吉

高 田 浪 吉

岡 崎 義 恵

前 田 夕 暮

釈 迢 空

高 島 通 夫

加 藤 洵 綾

南 原 繁

相 良 義 重

北 原 白 秋

小 暮 政 次

高 橋 城 司

清 水 勝 子

林 菊 之 輔

渡 辺 重 春

太 田 水 穂

遠 山 光 栄

初 井 し づ 枝

遠 山 光 栄

中 村 正 爾

小 宮 良 太 郎

加 納 小 郭 家

中 村 憲 吉

松 田 常 憲

関 根 よ し 哉

與 謝 野 寛

尾 上 柴 舟

尾 上 柴 舟

尾 上 柴 舟

尾 上 柴 舟

尾 上 柴 舟

尾 上 柴 舟

尾 上 柴 舟

尾 上 柴 舟

幾日も解けぬ垂氷は朝宵の煙に赤く煤びてを見ゆ
 いちじるく光るを見れば軒垂氷今朝の日射しに溶けそめぬらし①
 いはかげの垂氷のうへにあかときの日射しそめてここだ悲しも②
 岩そそぐ垂氷の樋にひたしあるゆで菜の青にあられふりきぬ⑧
 岩一つ越えて息づくわが背後崩るる音は雪か垂氷か⑩
 大屋根も小屋根も雪のしたたす垂氷みじかき寒き日つづく③
 会所場に寝軒ふかき雪ぐもり軒は垂氷のひるも凍み居り③
 岩壁の垂氷に太きあり細きあり谿くらぐらとまだ日当らず⑮
 機関車の一つあかりに天井の垂氷きららと見えては過ぐる⑩(素月集)
 木にのぼり垂氷折り喰む子らのあり楓の樹液このごろ甘し①
 草崖をつたひて下る山水が垂氷となりて太りつつあり
 草の上の揚水塔に垂氷あり影長々と吾が歩み立つ②
 氷りたる赤土のうへにこまかき垂氷ならびて心ひくもの(小園)
 駒の上をふく風さむくたつ髪に垂氷さがれり雪の下みち①
 寒き風松の梢にふきすさび月光ぞさす軒の垂氷に(多磨二)
 山頂にたなびく雲のひとひらは垂氷のごとくかかりてあるも
 谷川の早瀬の上にかたぶける笹の葉群は垂氷しにけり①
 旅行くと振り返りみれば吾が家の垂氷の下に妻立ちて居り
 垂氷あまた柱のごとく地に立てる山の上のトンネルを通りつつ居り②
 垂氷とけひなたにむるく鶏のたり尾もながく春は来にけむ(きさらぎ)
 垂氷より光のかたまり落ちて来る七面鳥は未だつるまず②
 俵あむ窓に垂氷の雫やみ冬の短日くるるはやしも
 椿さく木原朝呀ゆ八瀬の川垂氷のなかに水ぐるま鳴る

門 間 春 雄
 白 水 吉 次 郎
 三 浦 義 一
 太 田 水 穂
 松 村 英 一
 中 村 憲 吉
 中 村 憲 吉
 松 村 英 一
 尾 上 柴 舟
 酒 井 広 治
 大 橋 松 平
 近 藤 芳 美
 斎 藤 茂 吉
 落 合 直 文
 山 本 友 嘉
 古 泉 千 桎
 大 村 呉 樓
 結 城 哀 草 果
 大 橋 松 平
 和 田 山 蘭
 斎 藤 茂 吉
 結 城 哀 草 果
 山 川 登 美 子

垂氷して溪に真白き水ぐるま今日もゆるがず日を弱みかも① 現代短歌全
 ナハロフカ区に近づかむとしてこのあたり垂氷の長き家見て過ぎつ⑧
 軒したを垂氷にとぎすいく日か酒蔵より出づる雪みちひとつ③
 春浅き津軽の里の家々は垂氷とけつつかけの鳴くらむ(きさらぎ)
 日並べて火を焚く酒蔵はぬくみ持ち屋根の雪とけて大垂氷せり③
 病院の高き垂氷の下ぐり放たれて出づ昏き雪の道③
 広瀬川切り立つ岸に垂氷たれ影は落ちたり青淀のうへ(暮瀬)
 冬最中の冬至もすぎて寒さきびし日に日に太し軒の垂氷は
 吹雪風まともに強し軒先の垂氷は風にまがり氷れり①
 冬の空晴れて明るし並びたる垂氷光りてしづくするかも
 砲身に結びし垂氷そのままに今宵も暮れて星二つ三つ(支那事変戦地)
 窓にうつる垂氷の影の一ならび今宵の月夜なきらけくこそ①
 道の辺の杉の葉末も垂氷してみる目さびしき山路なるかも①
 もの凝固る気配幽けし屋廂の垂氷の小縁月に照りつつ(多磨二)
 矢づたふ陽が渡らへば角だちし垂氷の光したたりにけり③
 雪山に崖のうつろの暗くして大垂氷の並みさがりたる①
 わがこころ垂氷のごとくこほりぬと或る夜のさむき消息に書く
 笑ひ合ひわれらるとき灯のとより小さき垂氷のかがやく窓べ④

たるひ【名詞】 (足日)

物事の満ち足りるよい日。充実した日。

足日本の山の氷柱に朝彦の光にほへりいつくしきかも②
 足日本の山は禿して玉ちはふ神の森の木それも枯らさゆ②

與謝野 寛
 斎 藤 茂 吉
 中 村 憲 吉
 和 田 山 蘭
 中 村 憲 吉
 山 下 秀 之 助
 岡 崎 義 恵
 結 城 哀 草 果
 神 原 克 重
 結 城 哀 草 果
 木 山 逸 男
 平 福 百 穂
 福 田 夕 咲
 福 士 清 一
 中 沢 庭 柯
 鈴 江 幸 太 郎
 吉 井 勇
 山 下 秀 之 助
 長 塚 節
 長 塚 節
 長 塚 節

新た代の大き正しき御代の秋の今日の足日たるひの天晴あはれれにけり⑥ （重藤吉） 佐佐木 信綱

阿里山の 幾千歳経し 森の中に 今日の足日の 祝ぎ歌うたはむ② 下村 海南

大いなる年の生日の足日にぞ女男のちぎりは神もよろこぶ （のほり路） 斎藤 茂吉

微かなる臣のこの身もひれ伏してけふのひかりの足日をぞおもふ （のほり路） 斎藤 茂吉

北のみ民みなみのみ民けふの生日いくひけふの足日たるひを祝ぎたてまつる⑥ 斎藤 茂吉

今日こそは生日の足日高御座御典みことり挙げます瑞の日豊の日① 武島 羽衣

國はらを花の八重雲たちなびく天あめの足日にまつりおこなふ 伊藤 左千夫

大君のいでましの日のかがやきのけふの足日に怠りあらめや⑬ 斎藤 茂吉

足日たるひ今日秋高晴れて天地のそくへの極きはみ御光足らへり 村上 成之

晴れわたる天の足日や秋の野の花さへ色に照り満ちにつつ 島木 赤彦

み民らの心の下に愁ひたるうれひは晴れぬあはれ足日や④ 島木 赤彦

御民らはひたぶるにして大いなる覚悟を極めよけふの足日たるひに （のほり路） 斎藤 茂吉

だるま【名詞】 【達磨】 【ダルマ】

①中国禪宗の祖。南インドの王子として生まれ、般若多羅から教えを受け、中国に渡って禪宗を伝えた。少林寺に九年面壁したといわれる。五世紀末から六世紀末の人とされる。なお、「達磨」と表記して、歴史上の人物として扱うことを示し、宗門上の伝説と区別することがある。円覚大師。達磨大師。生没年未詳。②①の座禪姿を模して作った張子の玩具。赤く塗り、全体を丸く形どり、底を重くして倒してもすぐ起き上がるようにしてある。開運の縁起物とされ、最初片目だけ書き、願いがかなったときにもう一方の目を書き込んで祝う。起き上がり小法師。不倒翁。③形が丸いものや、全体の色が赤いものをいう。

秋寒の書院寂としてふるびたるだるまの絵像ともほしげなり 金子 薫園

あるものは達磨おとしを興がりて落すとすらむ心ゆるぶな① 花田 比露思

児が捨てた赤いだるまが見えてゐて庭草もすつかり冬枯れてきた② 清水 信

捏ねあげし赤黒き土砂の土達磨の形をなしておもしろ② 中沢 庭柯

この翁店を開くと棚の上に達磨の顔を置き並べたり① 花田 比露思

この夜よし春は達磨の朱しよの額を千万両とほざきたりける 北原 白秋

さむざむし春の灯立はだてや大市と目無し達磨の夜の市いまは 北原 白秋

潮そこる堀の達磨の打かしぎ空しき船腹はらの内部の明るさ② （現代短歌大系） 新井 洗

人波と夜巾の達磨見てのぼりいやなぐさまず電にうたれつ 北原 白秋

ぬば玉のヤミのひじきは北蝦夷のダルマの豆にいたくし劣れり① 正岡 子規

速く来て春は競り上げたのめなし目無し達磨に目のひらく何時 北原 白秋

春いまだ寒き達磨は目の無くて眉ばかりなる色のむなしさ⑨ （現代短歌大系） 北原 白秋

春寒き大屋じやの午や神棚にいつくだるまは片眼入れてあり① 穂積 忠

春や睦月市は立てども山こづむ朱あかの達磨に目はなかりけり 北原 白秋

ひげだるまにひげがないといふいや達磨などそもどこにもゐなかつたといふ⑭ 土岐 善麿

法師居らぬ山寺に来つ達磨などゑがきのこして霧分けかへりし⑧ 安江 不空

わが背子がゑがく達磨のかたはらにゑがき添ふべし手無炭取① 花田 比露思

だるまいち【名詞】 【達磨市】

神社や寺の縁日で開かれる縁起物の達磨を売る市。多く東日本で一月ないし年末に開かれる。

達磨市幣ふ夜の灯は安中の宿出はづれて寒き山方 北原 白秋

だるません【名詞】 【達磨船】

積荷を運ぶための幅の広い大きな伝馬船。

だるま船にパルプ積みこむクレーンの操作見てゐしが棧橋へいそぐ 橋本 徳寿

流るごと河下り来し達磨船のこの鈍重をわれ羨しめり （村野四郎） 長沢 一作

だるまてら【名詞】 【達磨寺】

達磨寺目無し達磨の本市は曉かけて夜もすがらあはれ 北原 白秋

達磨寺羹おりつつ灯はあかし目無し達磨よ泣きたかるべし 北原 白秋

二十何年ぶりにふるさとの野の雲雀きくと思ひ聴つ達磨寺の山に⑤ 吉野 秀雄

だるまやま【名詞】 【達磨山】